

月刊

いじろのとも

第五卷

八月号

早苗田

語ること行ふこと

ためになる

たとえ多くを

語るとも

行わざれば

怠惰なりけり

牛飼いが

他人の牛を

数えること

修行者の

部類に入らぬ

そんな者

早苗田や

未来に期待

抱かせり

すがすがし

梅雨の晴れ間の

早苗田は

早苗田や

ことしこそはと

期待こめ

人生を考え直して

みたい人は 八

『老子』解説(七)

今月号は、第二十一章を取り上げます。

(第二十一章) 徳を体得した人の「容」は、ただ道にのみ従っています。道というものは、「恍(こう)」「惚(こつ)」「惚(こつ)」です。逆に、惚であり、恍であり、惚です。その中に、「象(しょう)」があります。恍であり、惚です。その中に、「物」があります。「窈(よう)」「冥(めい)」です。その中に、「精(せい)」があります。その精はまさしく「真(しん)」です。その中に「信(しん)」があります。

これを読んでお分かりの方は、中国文学か中国語を専門になさった方だと思えます。一般の方には分からなくて当たり前だと思えます。そんな言葉ばかりを羅列して申し訳ありません。括弧で囲んだ言葉を日本語に直して訳してもよいのですが、そうしますと、この漢文のもつ

爽やかさが消えてしまうような気がして、先月号と同様に、殆ど読み下しに近い忠実な翻訳にしました。以下の解説をよく読んで、もう一度味わっていただければ、この方がよいように思えるのではないのでしょうか。

実は、もう一つこのようにした理由があります。それはこれまでの多くの人の解釈が余りにも、老子の真意から離れたものなので、そのことを示すためにもこうしておいたほうが、説明上都合がよいからなのです。なお、この訳文は原文に忠実なのですが、最後の数句を省略しています。いつものように、老子がこんなところで、そんなことをいう訳がない、後で追加されたものと考えられるからです。

順次、解説していきます。まず出だしの徳ですが、これは私の「自己・他己双対理論」で言えば、自我 人格の機能領域で達成されるべき属性です。自我 人格はそれ以下の「あたま」「からだ」「こころ」の各機能領域を統合し、組織化し、監視し、統制する、働きをしています。ですから、この徳性は全機能を総動員するもので、体得すべきものと言えます。

次に、そうした徳を体得した人の「容」とありますが、この容を正しく解釈した本は、私が買った十数冊の本の中にはありませんでした。それらの本とて、これまで

二千五百年にわたって解説されて来た多くの本を参考にしているのだから、これまで無かったといってもよいのかも知れません。

それらの解釈は、「容」を動作、挙動、姿、形、振る舞い、などとしており、何れも外に現れたものとしていいます。私は、これは、そうではなくて、心の「内容」を言っているのだと思うのです。内的な体験の世界を言っているのだと思うのです。それは、続いて出てくる「中には」という表現の多用によっても裏付けられているように思えます。「容」はどこまでも「心の中」のことだと思うのです。

次に「道にのみ従っています」という部分ですが、それは心の中は道を体験することにのみ従事している、ということを行っているのだと思います。

では、その道とは何か、といえますと、それは心で起る恍（こう）であり、惚（こつ）であり、逆に、惚であり、恍である、というわけです。この恍惚という言葉は、五月号で解説しました第十四章に既に出てきました。もう一度ご確認ください。でも、そこでの翻訳は不十分でした。機会があれば、補充したいと思っています。

そこでも述べましたが、恍惚には うっとりとする状態と、ぼんやりとして、はつきりしない状態、の二つ

の意味があります。恍惚を恍と惚に分けても同じです。それぞれが、二つの意味をもっています。

かつて「恍惚の人」という有吉佐和子の、いわゆる老人性痴呆に罹った人を扱った小説が、ベストセラーになりました。その時、恍惚という言葉が有名になりましたが、あまりいい意味ではありませんでした。老人性痴呆の特徴の一つとして、見当識の障害があります。それは、自我 人格機能が障害されて、自分が誰で、いまどこにいて、いまがいつなのか分からなくなる障害です。有吉佐和子は、そうなった状態を恍惚と呼んだのですが、前に見た二つの意味でいえば の意味だけで使われていると言えます。

道を体得する時も、自我 人格機能は抑えられて、恍惚の状態になります。ただ、老人性痴呆と違うところは、見当識が障害されているわけではないということ、の意味が大きな役割を果たしているという点です。

次に進みます。「その中に『象（しょう）』があります」という部分です。この象を実は、前の第十四章で、私も、現象と訳してしまいました。参考にしたこの本を見ましても、これを「現象」以外に訳している本はありません。しかし、これを心のなかで起こっていることに限定して考えますと、現象と訳すことは、普通は外界で

起こっていることと考えられ、誤解を招いてしまうことになってしまいます。そうなりますと、これはとても訳しにくい言葉です。心の中で起こっていることを言葉で表そうとしているわけですから、その体験の無い人には結局は理解できないことなのです。でも無理に訳しますと、「兆し」ではどうかと思います。それは、自己の純粹な体験です。ただ自己があるという体験です。何にも規定されないで、宙に浮いて、ただ自己があるという体験なのです。

次に、いま見ました「象があります」に続いて、また「恍であり、惚です」と繰り返しています。このことは、象が心の中で起こっていることであることを、繰り返すことで強調していると言えます。

これに続いて「その中に『物』があります」と述べています。これがまた分かりにくい言葉です。全ての本が、物質と訳してしまっています。でも心の中の働きを表す言葉として考えますと、物質はどうもただだけません。私は、象が自己なら、これは他己を示すものでなければならぬと思います、辞書を調べてみました。大修館書店刊の『大漢語林』によりますと、幾つかの意味の中に、次のようなものがありました。「環境。世事。世間。神。鬼神。」予想通りこれらは、まさしく他己です。

こうした「もの」、例えば神を象徴するものが、恍惚の中に自己の兆しと同じように、何にも規定されることなく、宙に浮かんでいます。しかし、それは、「窈（よう）」であり、冥（めい）」である、ということなのです。

ここで言う窈も冥も同じような意味で、奥が深く、光がなく、暗くて、知覚できない、という状態を指しています。

こうした状態は、現実を遊離しています。いや、現実を超えています。自分だけの、現実を超越したイメージや直観の中にのみ存在するものなのです。人から見ても、勿論わかりませんが、人に言葉で伝えてみても、滅多に理解されることは無いものです。しかし、体験した人には理解することができます。そういう意味で普遍性をもっている体験なのです。

続いて、こうした窈であり、冥である、「その中に、精があります。」と述べています。この精を多くの本は、精气とかエネルギーとだけ解釈しています。でも、私もっと自己が生きていこうとする象徴的な意味をもたせて解釈したいと思います。つまり、ここに至って、兆しとしての象であったものが、精としてより具体化されているように思うのです。

かつて、人間の精神モデルを構築した時、精神の精は

自己を、神が他己を表すものだと考えていましたが、この老子の言葉に出会って、私が考えたことと全く同じことを、二千五百年前に既に考えていたことが分かり、大変感激いたしました。

精の意味を例の辞書で引いてみますと、解字のところに「きれいについた米の意味やすんだ心の意味を表す」とあります。

この意味から分かりますように、積極的に人間は、米をついてきれいにするように、自己のこころ磨いて澄んだ心になるうとする力をもっていると考えられるのです。それが道の人間への現れであると言えると思うのです。つまり、こうした力が、道の働きとして恍惚の中から沸きだしてくるのです。

次に、「その精はまさしく『真』です」とあります。

ここまで読んで頂けますと、私の精神モデルから言えば、この真は神に当たるものでなければなりません。物が既に、神を含むものであったわけですから、当然真もそうでなければならぬわけですね。例の辞書で調べてみました。いろいろな意味の中に予想通り次のような意味がありました。「自然のまま。みち。自然の道。自然の妙理。たましい。神気。」

先程の精が精気なら、こちらの真は神気ということでは

す。前の「もの」としての神が、より具体化されて、こころを磨くのと同じように、人間の目指すべきより具体的・積極的な働きとして、真で表現される「みち」となるのです。それは、人の道であり、天の道であり、仏の道であり、神の道であり、自然の道なのです。人間が「よるべ」とすべきものとしてのみちなのです。それがないと人間が精神的健康を維持できない、あるいは生命の維持すらも危うくなるようなべなのです。

最後に、精はまさしく真であって、「その中に信（しん）があります」という部分に進みます。この信は、私のモデルから言いますと、精と真（神）の弁証法的統合に関係したもののなのです。自己を信じることと、他己を信じることが自分自身のなかで可能となり、かつそれらが統合されるのです。

信は、例の辞書によりますと、まこと、信ずること、約束を守ること、とあります。これは道として、自己と他己が恍・惚や窈・冥の中で統合されるとき、私のモデルの情動・感情機能の属性である「情性」（自分を抑えて人をたてる性質）も、自我・人格機能の属性である「徳性」（自分が精進して人の期待にそって役にたとうとする性質）も、共に真実として働くことができるということとを表しているように思われます。

自作詩短歌等選

舞台俳優

舞台俳優は
せりふを言うのに
頭ではなく
腹の底から
言えないと
芝居の途中で
声が枯れてしまつて
発声できなくなる
という

人生の舞台も
またしかり

真の修行者

ためになる
こと少ししか
語らずも
理法に依りて
実践し
情欲怒り
迷妄を
全て捨て去り
気を正し
こころ解脱に
至り来て
執着すること
無き人は
これぞ真の
修行者なりけり

死ぬと覚悟すれば

人はみな
死ぬものなりと
覚悟せよ
それを知る人に
争い静まる

くちなし

雨戸あけ
くちなしにおう
今日もまた
くちなしの
におい届くは
かぜまかせ

道に迷う

どこかへ行くのに
地図がなければ
道に迷つても
仕方ないが
ただ尋ねながら
行けばよい
でも

生きて行くのに
人生の地図を持たず
道に迷つたら
なかなか
取り返しが
つかない

自作随筆選

相対の自覚者

夢から醒めよ

スポーツへの過熱

人間は

夢見てりや

他の存在者と同様に
相対である

それが夢とは
気付けない

でも

多くの人の
執らわれのこと

その相対を

意識できるのは

人生の

人間だけ

夢からさめて
執らわれを

だから

捨て去りてこそ
覚者となりぬ

相対でないものが

欲しくなり

それによってだけ

夢うつつ

真の安定を

またたくうちの
人生ぞ

得ることができ

最近、世界的にスポーツへの過熱が見られるように思
います。

いま、サッカーの世界選手権大会がアメリカで開かれ
ていますが、ニュースを見ていて問題をいくつも感じま
す。一つは、オリンピックと同様、ナショナルリズムの高
揚が心配されます。また、コロンビア、エスコバル選手
の射殺事件に見られるような、暴力団・マフィアのサッ
カー試合での賭博、およびその賭が思いどおりに行かな
かったときの報復としての殺人、さらに筋肉増強材など
の薬物の摂取露呈とそれを否定する堂々たる虚言、など
です。サッカー一つをとってみても、多くの問題点をも
っているように思えるのです。

最近、お付き合いもあつて新聞をとっていますが、月
曜日など他に書くこともないのかも知れませんが、スポ
ーツ記事に三頁を割いています。ところどころに、カラ
ー写真まで入っています。何だかスポーツ新聞ではない

のかと勘違いしそうにさえ思えます。多分、読者がそれを望んでいるから、新聞社もそうするのだと思いますが、驚きます。

日本もサッカーが盛んになってきましたが、ニユースの内容は、サッカーだけでは勿論ありません。今なら相撲もあります。高校野球もあります。その他、私は殆どみることもありませんが、ゴルフ、テニス、プロ野球、などいくらでもあるようです。

テレビ・ニユースを見ていて、サッカーで得点したときの選手の動作や応援団の熱狂ぶりを見るにつけ、何かものけにつかれたように思えてしまうのは、私だけなのでしょうか。

大げさなガッツポーズ、頭髪の模様を付けた剃りあげ、顔や頭へのペインティング、集団による統一された応援風景など、私はそこに、何か社会的な精神病理を感じてしまうのです。なぜ、たかがサッカーにああまで熱狂しなければならないのか、病理と思う以外に理由を思いつかないのです。

こうした現象は、目立ちますが、何もサッカーに見られるだけではないと思います。日本の中に、あるいは世界中に、スポーツ全般に対する病的な過熱があるように思えて仕方ありません。

これが、物の豊かさを得て、驕慢（きょうまん）になった現代人の心の貧しさを反映するものでなければよいのですが。

釈尊のことば（二六）

法句経解説

（九七）何ものかを信ずることなく、作られざるもの（ニルヴァーナ）を知り、生死の絆を断ち、（善悪をなすに）よしなく、欲求を捨て去った人、かれこそ実に最上の人である。

この偈は、一読してなかなか分かりにくいのではないかと思います。

出だしの、何ものかを信ずることなく、というのが第一に引つかかると思えます。宗教は信仰とか信心と呼ばれますように、信じることがそのスタートになっています。信じる者は救われる、という言葉さえあります。なのに、何ものかを信ずることなく、とは驚きです。しかしここに一つの真実があることに気付かなければなりません。

それを理解する鍵は、この七章の表題になっています。「真人」にあります。この偈も、ですから、解脱に至った、この真人の境地を述べたものなのです。

実は、偈の最後にあります「最上の人」の境地は、もはや、何もかも信じなくてもよいのです。生かされて生きる喜びの満ちあふれた人は信じようとするはからいなど超えて、あるがままにあるだけで、やすらいでいるのです。死んだら仏さまがお迎えに来て、お浄土に生まれ変わる、などと信じることなどいらぬのです。明日どうなるかと、まったく思わすにわらないのです。信じる執らわれすらを捨てている、といつてもよいと思います。

でも、修行途中にあつて、まだ解脱に至っていない人には、信じる必要があります。『大乘起信論』という大変有名な本がありますが、この本は信じることを説いています。私たち人間は、外界の他者に定位する、つまり誰かと心を通わせあつていないと、バランスを崩して、悪を犯してしまいます。そして、悪を犯さないためには、その誰かが、悪を犯さない人である必要があるのです。それが、仏教では仏であり、キリスト教では神であるというわけです。そうした神や仏を信じることによって、私たちは出来るだけ過ちを犯さなくてもよいようになれ

るのです。

次の、「作られざるもの（ニルヴァーナ）を知り」という部分ですが、なぜニルヴァーナは作られないと言えるのか、分かりにくいのではないのでしょうか。作られると言えるものは何かによつて作られるのですが、ニルヴァーナは無規定なものですから、何かからできていては困るのです。それは無規定に「ただあるだけ」なのです。だから作られざるものと言えるのです。

偈の続きの「善悪をなすによしなく」という部分ですが、この意味は、善をなそう、悪をなさないでおこう、とつまらぬ思いをしなくてよくということ。解脱に至りますと、思い煩うことなく、自然に善をなし悪をなさないので。自然に生死を超え、欲求に執らわれなくともよくなるのです。

(九八) 村にせよ、林にせよ、低地にせよ、平地にせよ、聖者の住む土地は楽しい。

にぎやかで、遊びを楽しむところのあるような町ではなく、人の少ない、村でも、林でも、低地でも、平地でも、聖者はどこに住んでいても、たった一人であっても、心は楽しさで満ちあふれている、と言っているのです。

普通の、多くの人は、一人でいると誰かが必ず欲しくなりますし、人がいても、必ず何か自分の気晴らしのための遊びがしたくなってきます。一人で楽しめるものであっても、人と交わってする楽しみであつてもです。

では、聖人と普通の人ではどこが違うのでしょうか。一言で言えば、聖人は心の中の絶対、宇宙根元の原理、超越、仏さま、神さまに自分を定位していて、外界の人や物に定位していないということです。ということは、誰に認められなくても、誰に愛されなくても、誰にほめられなくても、逆に言えば、誰に拒否されても、誰に嫌われても、誰にけなされても、そうしたことに左右されることなく、幸せで楽しいということなのです。

(九九) 人のいない林は楽しい。世人の楽しまないところにおいて、愛着なき人々は楽しむであろう。かれらは快樂を求めないからである。

この偈は、前の(九八)と同じことを言っています。前の偈の解説でも述べましたように、聖人は人に定位することを求めています。人を求めているとすれば、その人を幸せにしてあげたいからだけなのです。自分の寂しさをまぎらわすために人を求めることはありません。

また、どうしても人を幸せにしなければ、自分が不幸せであるということも、勿論ありません。どんなことにも執らわれないのです。

ですから、普通、人がいないところは生活に不便で寂しいところですから、世人はそんなところは住みたくありませんし、まして楽しむことはできません。大抵は住んでおれないと思います。

なのに、何に対しても執着のない人、何に対しても愛着のない人は、そういうところでも楽しいのです。

執着が無い、愛着がないということは、快樂を求めないということでもあります。うまいものを特に求めて食べたいとは思いませんし、よい家に住みたいとも思いませんし、きれいな着物を着たいとも思いません。まして、財産を作りたいとも思いませんし、名誉を得たいとも思いませんし、出世したいとも思いません。さらに言えば、親も子も連れ合いも先祖も国も民族もないのです。

そんなものに執らわれたら決して幸せは訪れてこないのです。逆に言えば、そんなものが一切なくても、勝手に幸せ感がわき出してくるのです。ただ、生きているだけで幸せなのです。

第八章 千という数にちなんで

(一〇〇) 無益な語句を千たびかたるよりも、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞くほうがすぐれている。

(一〇一) 無益な語句よりなる詩が千あっても、聞いて心の静まる詩を一つ聞くほうがすぐれている。

(一〇二) 無益な語句よりなる詩を百もとなえるよりも、聞いて心の静まる詩を一つ聞くほうがすぐれている。

三つは殆ど同じ内容のことを言っています。つまり、無益な語句が幾ら多くあっても役立つはない。たった一つの、聞いて心の静まる語句や詩のほうがすぐれている、ということなのです。

私は、学生に、新聞を見るな、テレビを見るな、といっています。この言葉に込められている私の思いは、学生であるいまは、知識は学問をしてそこからだけ得る、それ以外から知識を得る必要はない、もし、テレビや新聞を見る暇があったら、自分自身の心を見る、そのための古典を読み、ということなのです。

この私の言葉は、なにも学生だけに当てはまるわけで

はありません。この偈にいつていることも一脈通じているのです。

現代は「心の静まる」ことに価値が殆ど置かれていません。この「心が静まる」とは、心が執着の対象にかき乱されることなく、静かに反省し、自らの心が解脱を目指す状態になることなのです。

学生は、学問をするのが使命です。そのことによって、自己を磨きます。そして、学問の面白さと、学問の限界を知ります。それは自己の限界でもあります。その限界を見つめ、自己の無知に気付きます。そして、それによって生き方を学ぶのです。

その、自己を見つめる時、読むべき、あるいは聞くべき語句は、新聞やテレビにはないので。その多くは古典にあります。いま私が薦めたいのが、空海であり、道元であり、老子であり、ソクラテスであり、キリストであり、釈尊なのです。俗なる執着の対象から、心を人生の真実なものに開いて、これらの人たちの言うことに耳を傾ければ、必ず得るものがあります。そこは、心静まることで溢れています。

読者のHPLCモニタリング

健康のもと(六)酒類のkokufu風味と薬効については前述の通りで、今回は主食についてその長短を述べてみる。主食中でタンニン含量の多いのはそばである。しかし茹ですぎるとタンニンはそば湯に溶けこむ。だからそば湯の味は中年以上の好物になるのだ。

食品中のタンニン	
(一) 主食	
(百万分の一) ppm	
そば	一六
押麦	一三
パン	一二
きび	七
白米	三

右表は麦、パン、きび、白米の比較で、白米の過食はアレルギーの素になる証明である。人の一生にこのタンニン摂取量の差を考えてみよう。四国産の米は北陸産に比べてタンニンは半分しかない。日照時間の影響だろう。南国産ほど味が落ちる。前掲日本酒も同じである。米飯と雑食との差は数字に明白だ。また、タンニンには最後

にあげるような生理作用がある。あらゆる病気に有効なのである。人が一生に食べるタンニンの合計は健康長寿の大差となって現れる。恐ろしいことである。次は、野菜について語ろう。

タンニンの生理作用一覧

抗アレルギー、滋養強壮、抗炎症、疲労回復、硬化防止、精力増強、酸化防止、血液浄化、防腐、強心利尿、制菌殺菌、血管強化、抗ウイルス、血圧調整、中毒解毒、結石・駆虫、整腸、外傷・止血、食欲調節、鎮痛鎮痒、解熱、精神安定、制癌・制腫、手術前後、筋骨強化、矯味脱臭、強腎強肝、化粧品、蛋白質更生、酒類のkokufu風味。

(阿南市・片田一郎) 短歌

夕暮の ペロケの灯り なつかしも

ロシア婦人の 白き肩など

(ペロケは社交場) 竹竿に

アカシアの花 とりくれし

友の背中も 幼なかりし日

アカシアの セメント道に 緑濃く

鞭しなはせて 馬車はしりゆく

大連にての三首(千葉県・中西美江) 俳句

しぼり出す新茶の味をくくみのむ

螢火をのこして闇は更けて行く

山つなく虹しばしあり母の郷

涼しさや猫も顔出す朝の庭

いただいた団扇ひとふりしてみたり

老鶯の森に鳴きけり夕明り

(徳島県・須藤一樹)

後記

一、三匹生まれた子犬ですが、二匹は貰われていきまして、一匹だけ残って親と一緒に育っています。モモコと名付けました。普段モモと呼んでいます。犬でも親のすることをよく見ているので、その通り真似をしています。二匹連れて散歩に行きますと、親子ですか、とよく聞かれます。とてもよく似ています。

二、親のエリーが先日避妊手術をしました。二、三日は痛がっていました。

三、「読者とのエコーコミュニケーション」欄に新たに俳句を応募して下さった須藤さんは、徳島県麻植郡川島町の町長さんをされた方で、俳句歴も長い方です。今後もう続けて投稿して下さいます。ご期待下さい。

四、東京のある出版社から、私の最近の論文七本を集めた本を「人間精神学序説 自他統合の心理学構築とその応用」と題して出版して下さいることになりました。

少し高くて一万三千円(税抜き)になりそうです。私の考えが少しでも広まって、障害児・者が解放される社会、あらゆる人(戦争)のやむ社会、あらゆる人が幸せになる社会、の実現を願っています。

五、四国は、雨がなく暑い日が続いています。徳島に流れ込む吉野川上流の、高知県にある四国の水瓶、早明浦ダムの水が減ってピンチです。香川県は、この水のお世話になっています。

お便り、質問、感想、詩、短歌、俳句、川柳など、どうぞお寄せ下さい。

<p>月刊 こころのとも 第五卷 八月号 (通卷 五十六号)</p>	<p>平成六年八月八日 (発行人) 中塚 善成<small>ぜんじょう</small> (制作) ユニオンプレス (発行所) ひびきのさと エココミュニケーション研究所 〒771 43 徳島県勝浦郡勝浦町星谷 星の岩屋</p>
<p>本誌希望の方は、送料として郵便振替で年間千円を 次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさ と 口座番号 01610838660</p>	